

「私のうそと神さま」

東洋英和女学院小学部 3年生
小林祐月

算数のテストが返ってきた。私はうそをついた。百点だったらアイスクリームを買ってもらえたのに、百点ではなかったからだ。お母さんには、「まだテストは返ってきてない。」と言った。その日のごはんは、あまり食べられなかった。小さい時、「うそをつくとお心がまっ黒になるよ、神さまに見はなされるよ。」とお母さんに言われたけど、私はもうまっ黒な悪い子になっちゃったかもしれない。いつもみたいになっこをしてほしいけれど、だっこをしてもらうとまっ黒がわかっちゃう。

次の日、私はお母さんに、「先生が点数をつけまちがえたからまだ返してもらってない。」と、またうそをついた。するとお母さんは、「自分と神さまにはうそをつけないよ。」と言った。「本当だもん。」と私はないた。「うそじゃないなら、どうしてなくの。」とお母さんは、私をおいて行ってしまった。私はもっと大声でないた。あつくて、電車の音も人の声もみんな、周りの音が聞こえないような気がした。世界中に太陽と私しかいない気がした。だって私は、神さまに見はなされちゃったんだもん。なんでこんなに悲しいのだろう。もう悪い子なんだから平気なはずなのに、心がいたいんだろう。おなかがいたいんだろう。

「もう、ちゃんと言おう。全部言おう。」そう思ったら、いっぱい空気がすえるような気がした。そのことをお母さんに言おう。私は、お母さんをおいかけて走り出した。走りながら、神さまにごめんなさいを言おうと思った。でも、神さまってどこにいるの、お空に向かって言えばいいの。一生けん命に走ったのに、お母さんはどこにもいない。私はさっきの所にもどった。やっぱりお母さんはいない。神さま、やっぱり私はいいい子でいたいよ。うそをついても平気と思ったけれど、心はだませない。自分の気持ちをだませない。そうだ、まず自分に「ごめんなさい。」と言おう。だって私は、神さまにつくられたのだから。自分に言ったら、きっと神さまにも伝わる。

神さまがいつも私といっしょにいてくださるから、心が苦しかったんだ。ごはんも食べられなかったし、テストのゆめばかり見たんだ。そのこともお母さんに言おう。息がはあはあ苦しかったけれど、もう一度走ろうとしてふり返ったら、お母さんが立っていた。「ずっと後ろにいたのよ。」と言われた。神さまも私とずっといっしょにいてくださったんだと、私は思った。私がうそをついている間も、神さまはいてくださったんだ。